長野市立博物館 Nagano City Museum

博物館だより

第75号 2010.3.25

信州新町博物館が市立博物館の分館になりました

平成22年1月1日に信州新町は長野市に合併となり、信州新町博物館（信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館・ミュゼ蔵）が長野市立博物館の分館となりました。市民の皆様に広く活用していただくために、4館をご紹介いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

信州新町美術館・信州新町化石博物館・有島生馬記念館

■所 在 地／信州新町上条88-3（電話：026-262-3500）
■開館時間／9:00～16:30（入館は16:00まで）
■入 館 料／一般500円・高校生300円・小中学生200円（3館共通・土曜日は小中学生無料）

ミュゼ蔵（展示ギャラリー）

■所 在 地／信州新町新町37-1（電話：026-262-2500）
■開館時間／10:00～18:00

信州新町美術館

二紀会創立委員の栗原信画伯が昭和22年に当時の水内村に来遊された折に「フランスには小さな村にも特色あるミュゼがあり感動した。この村にも美術館をつくりましょう」という提唱がきっかけとなり、昭和35年に信州新町美術館条例が制定、昭和57年に美術館と有島生馬記念館が開館いたしました。

所蔵作品は全て諸作家、篤志の方々からの善意の贈り物で、現在では2,500余点となっています。この中には、日本水彩画会創立委員で近代水彩画壇の大家である赤城泰舒（やすのぶ）の作品320余点、昭和の北斎といわれる版画家小泉癸巳男（きしお）の版画と版木の全ての220余点など、貴重な作品も収蔵しており、常設展示と年数回の特別展や企画展を開催しています。

有島生馬記念館

有島生馬は近代日本洋画界不朽の大功績者で、雑誌「白樺」でセザンヌを日本に初めて紹介するなどその創作活動はあまりにも有名です。昭和25年に信州新町を訪ね、このとき北アルプスより流れる犀川の美しいダム湖を「琅鶴湖（ろうかくこ）」と命名しました。

記念館の建物は、明治23年にイタリア人貿易商が鎌倉市の稲村ヶ崎に建てたコロニアルスタイルで、通称『松の屋敷』と呼ばれ、制作活動と大正・昭和の日本の芸術活動の拠点となりました。生馬没後に建物が取り壊されることを聞いた当時の町内の有志が譲渡を受け解体し、町内外からの寄付と生馬の一人娘、暁子さんのご好意により信州新町に再建されたものです。

記念館には有島生馬の油彩画や原稿、筆、印章などが展示されています。

信州新町化石博物館

信州新町出身の西沢勇（たけし）さんが、6000点に及ぶ化石コレクションを収集されました。西沢さんが亡くなった後に奥様から信州新町に昭和58年に寄贈していただき、平成5年12月に開館いたしました。

展示は、西沢コレクションは世界53カ国から収集された化石を中心に、信州新町から発見されたクジラや貝化石を紹介することで、化石の図鑑のように楽しく見ていただける内容となっています。昨年は博物館駐車場に体長32mのディプロドクスの実物大復元模型や、茶臼山自然史館にあったクビナガリュウの骨格が新たに展示として加わりました。

ミュゼ蔵

ミュゼ蔵は信州新町美術館の別館として平成9年に開館いたしました。貸館となっておりますので、グループや個人での展覧会を開催することができますので、どうぞご利用ください。館内にはくつろげる喫茶室もあります。

展覧会や行事などは、信州新町博物館のホームページにも掲載しております。是非こちらもご覧いただき、信州新町までどうぞ足をお運びください。

（成田　健）

資料紹介 オレンジ色の土器、ねずみ色の土器

世界最古ともいわれている縄文時代草創期の土器は、およそ1万6千年前に登場したと考えられています。以来、私たち日本人は、土で作った器を使って食事をとる習慣をもち、今でもお米のご飯を食べるときは、金属製やプラスチック製の茶碗よりも、陶器や磁器の茶碗を使っている方が多いのではないでしょうか。

ところで、縄文時代や弥生時代の土器の色は、オレンジ色っぽい赤褐色を呈しています。それは、野焼きと呼ばれる焼き方で土器を焼いているからです。野焼きとは、焚き火と同じような状態の火の中に、直接土器を入れて焼く方法です。だいたい600℃から800℃の温度で、酸素を取り込んで焼かれるため、酸化焔焼成と呼ばれています。

写真1 野焼きで焼かれた土師器

野焼きで焼成した古墳時代の土器を、土師器と呼んでいます（写真1）。土師器は、機能性を重視し、文様や装飾が少ないのが特徴です。

今から1600年ほど前の古墳時代中期になると、新しい土器の作り方が朝鮮半島から伝わってきました。須恵器と呼ばれるこの土器は、ロクロを用いて成形し、登り窯で焼成するもので、専門の工人集団により作られたようです（写真2）。土器の色も、これまでのオレンジ色っぽい赤褐色ではなく、ねずみ色っぽい青灰色を呈しています。

登り窯では、薪などの燃料をある程度燃やした後に、窯を密閉して酸素を供給しないようにする還元焔焼成で、だいたい1100℃以上の高温で焼かれました。須恵器の特徴は、土師器と比べて堅くて壊れにくいため耐久性があること、透水性が低いことから水分の貯蔵に向いていることなどが挙げられ、逆に熱伝導率が低いことから、煮炊きには不向きです。

写真2 登り窯で焼かれた須恵器

ところで、写真3の土器は、土師器と須恵器どちらだと思いますか?

写真3 信更町田ノ口で発見された土器

昭和45年に長野市信更町田野口での農道工事の際に発見されたこの土器は、登り窯から発見され、須恵器の作り方で作られていました。では、どうしてねずみ色にならなかったのでしょうか。

この登り窯は松ノ山窯跡と名付けられ、6世紀初頭（須恵器編年ではTK47～MT15型式併行期）に作られたと考えられることから、現在のところ長野県最古の須恵器窯跡とされています。長野県に須恵器の作り方が伝わって間もない頃の登り窯ですので、おそらく何らかの理由で還元焔焼成することができなかったのではないでしょうか。いわば失敗作品ですね。松ノ山窯の製品は、大阪府南部にある和泉陶邑窯跡群と呼ばれる大規模な須恵器生産地で作られた製品とよく似ています。想像をたくましくすれば、陶邑窯から派遣された工人集団が、長野県に来て初めて須恵器を作った場所が、長野市信更町の松ノ山窯だったのかもしれません。

松ノ山窯以降7世紀前半までの間の窯跡は、現在までのところ見つかっていません。しかし、長野盆地では5世紀代の古い須恵器が比較的多く出土しており、またそれらの中には和泉陶邑窯の製品とは似ていない特徴をもっているものもありますので、松ノ山窯をさかのぼる別の窯跡が発見されるかもしれません。

（飯島哲也）

資料紹介

隠滝不動の養蚕絵馬（複製資料）

上の資料は芋井広瀬にある隠滝不動に奉納された絵馬を複製したものです。絵馬の大きさは縦90㎝、横3m60㎝と横長で、その中に養蚕の一連の作業の様子が、左側の種紙の掃き立てから始まって繭の選別まで描かれています。絵馬を奉納したのは更級郡笹井村上氷鉋（現川中島町上氷鉋）の養蚕農家の人たちで、明治34年に奉納したことが画面左の墨書からわかります。

奉納された明治30年代頃は生糸が日本の主力輸出品だった時代で、この頃、市内では現金収入を得るための大きな手段として、どこの農家でも蚕を飼っていました。この絵馬もそのような養蚕業の盛行のなかで、蚕の飼育がうまく行くようにとの願いから奉納されたものです。でもなぜお不動さんにこのような絵馬をあげたのでしょうか。現在隠滝不動には特に養蚕に関係するご利益はみられません。ただし養蚕が盛んな明治の頃、養蚕農家がその年の養蚕が成功するかどうかを御嶽行者にみてもらうことは多かったらしく、御嶽行者の多くが不動明王を信奉していることを考えると、お不動さんを祀る隠滝不動に奉納したのも不思議ではないでしょう。

それでは絵を少し細かく見ていきましょう。まず絵馬の上部に黒い鉄の剣が絵馬の幅いっぱいに打ちつけられています。これは先に見たように養蚕繁盛を不動明王に祈ったためで、剣は不動明王が持つ倶利伽羅剣を表していると思われます。続いて絵馬の右下、まだ小さな蚕に桑の葉を与えている女性を見守るように猫の後姿が描かれています。養蚕農家にとって猫は、蚕を食べてしまう鼠を退治してくれる頼もしい味方でした。絵馬の猫も、蚕の鼠除けの願いを込めて描かれたのでしょう。次に絵馬の右端上部を見てください。こちらには馬の姿が描かれた掛軸が掛かっています。実は蚕という虫は馬と人間の娘が恋に落ちるという話から生まれたとされます。

あるとき馬を飼っていた家の娘が飼い馬と恋に落ちます。しかし娘の親はこれを許さず、ひそかに馬を殺し、その皮を庭の木に吊るしてしまいます。これを見た娘が、馬の皮の下で嘆き悲しんでいると、馬の皮が翻って娘を包んで天に昇ってしまいます。そして天から「この虫を私の代わりと思って育ててください」と娘の声がして、白い虫が降ってきました。これを育てたところ生糸を吐いたので、親はこの生糸を売って暮らしたという話です。絵馬の中の馬の掛軸はこのような蚕の由来譚を踏まえて描かれたと考えられます。

ところで隠滝不動の絵馬は奉納されてからおよそ100年ほどの間に、板面には落書きがされ、大きな割れやヒビが入っていました。また、色褪せのため養蚕の作業の様子がわかりずらい部分もありました。そこで複製にあたっては、現在の雰囲気を残しながら落書きを消し、色褪せ部分を復元し、奉納当時の様子がわかるようにしました。

この絵馬はこの夏に開催する特別展「お願い!神さま仏さま～絵馬に見る人々の暮らしと願い～」で公開する予定です。

なお、最後になりましたが、隠滝不動を管理されている法学寺様、隠滝不動世話人の大日方福栄様には複製の許可等に関わり大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

（細井雄次郎）